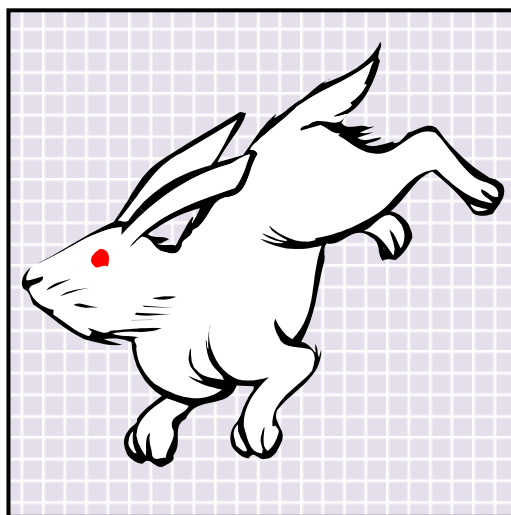
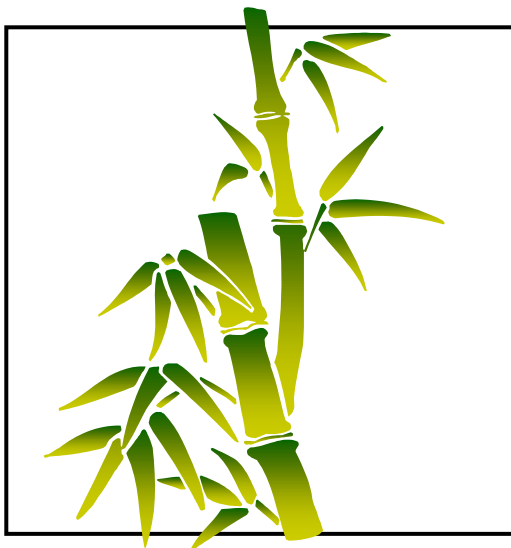


烏と兎が匆々しく

—姫海棠はたての永遠亭探訪録—



【1】

天文密葬の秘儀が解かれてなお、竹林の季節は緩やかに巡る。

秋も深まるこの季節、永遠亭の中庭にも時折冷たい風が吹き込んで、冬の先触れを知らせていた。

縁側に取り込んだ布団の上、ふかふかの耳を広げて寝転がり。忙しく洗濯物を取り込んでいる小間使いの兎達を見ながら、因幡てゐはふわあと大あくびを一つ。

「みんなー、サボらないようにねー」

空を見上げれば、さらさらと揺れる真新しい竹の葉の群。竹は春に紅葉して葉を散らせ、秋に若々しい新葉を茂らせる。時間も空間も流れの異なる迷いの隠れ里を覆い隠すには、なるほど相応しいものなのだろう。

「今年の夏はお天道様が二つ出たのかと思うくらいだったけど、随分冷えるねー。……自前の毛皮のある身としては、今ぐらいがやっと落ち着けて結構だけど」

おひさまの匂いする布団にぐりぐりと頬を擦り付け、てゐが心地よさいうとうとまどろんでいると――

「こら、てゐっ」

ぬくぬくと包まっていた上掛けを引き剥がされ、てゐは、ごろんと廊下に放り出される。

ブレザー姿の鈴仙が、腰に手を当てて見下ろしていた。

「んもー、なにをするのよ鈴仙」

「またアンタはひとりだけサボって！」

「ちえー。やることやってんだからいいじゃない。ちゃんと皆サボらないように見張ってるんだからさー」

口を尖らせ、反省の色もないてゐに、鈴仙は疲れたように深いため息。

「ほら、鈴仙もお疲れみたいだし一緒にどう？ シエスタのひとつも赦されないなんてブラックな労働環境すぎるんだってば」

「なに言ってるのよ」

そう言いつつも、鈴仙も温かそうな布団に心ひかれているのは確かだった。穏やかな午後の陽射し、静かに揺れる竹の葉の音、揺れる心情を表現するように、スカートから飛び出した尻尾も小さく揺れている。

それを目ざとく見つけたてゐは、ひよいと鈴仙の脚を引っ掛けた。

「うぶっ!!」

「よーし、みんななかかれー!!」

「[[[[わー]]]]」

ぼふ、と重ねた布団に倒れ込んだ鈴仙に、いつの間に
か集まつてきた兎達が次々と飛びかかつてゆく。

「っ、きゃあ!?! ちょ、やめっ、わああああ!?!」

たちまち兎達がぎゅうぎゅうと押しくらまんじゅうを
始める中、鈴仙は餡子にされて悲鳴を上げる。

「ちょ、ど、どこ触ってっ、ふああ!?! やっ、だめ、そ
こくすぐった……っ!?!」

「おお、えろいえろい。やらしー声で哭くねえ鈴仙? え
ろすネタにはすかさず飛びついて、あざといね鈴仙ちゃ
ん実にあざとい」

「違——って、ちよつとどいてっ!?!」

兎団子の具にされていた鈴仙が、ふいに表情を陰しく
して身を起こした。上に乗っかっていた兎達をごろごろ
と転げ落とし、長い耳をびんと震わせて立ち上がる。

「れーせん?」

兎達の下敷きになって、ぱちくりと目を瞬かせるてゐ
をよそに、ひとり真剣な表情の鈴仙は鋭く地面を蹴って
庭へと飛び出す。

「そこかっ」

赤い目を見開いて光の波長を操作し、彼女は見定めた
竹林の一角へと、風を切り裂く高速の弾幕を撃ち込んだ。

「痛——っ!?!」

弾幕の斉射は狙い過たず揺れる竹の葉を穿ち、ぱきゅ
ーん、と軽快に撃墜音を響かせた。着弾地点の若竹を揺
らしながら、そこに潜んでいた何者かが落っこちてくる。
中庭に転がり出てきたのは、長い黒髪の少女だった。

「……ふ、ふいうちとか、なしでしよ……?」

それだけ呟いて倒れ込む彼女に、鈴仙は警戒を解かず
にじつと伸ばした指先を構えるが——

「……誰?」

べしやんとうつ伏せに倒れ込む少女は、白のブラウス
にチェックのスカート。足元にはニーソックスに高い一
本歯の下駄という服装で、髪を左右に括って紫のリボン
でまとめていた。

この付近では見かけない格好で、それなりにあちこち
に顔の利くてゐにも見覚えがない。

「えつと……」

同じく心当たりはなかったのだろう。鈴仙が縋るよう
に視線を向けてくる。

てゐが黙って首を横に振ると、月の兎の頬を冷たい汗
がつうと滴り落ちていった。

「ねえ鈴仙、撃つ前にだれか確認してからでも遅くな
ったと思うんだけど」

「わ、わかつてるわよ!?! っていうかそんなに威力強く

したつもりは……あれ……？」

指先をのぞき込んで首をひねる鈴仙をよそに、てゐは倒れ込んだまま身動き一つとらない彼女のそばへ近寄ってゆく。

「……おい？　ねえ、生きてるー？」

「……………」

爪先を伸ばしてつんつんとその頬を突つついてみるが、彼女はぐったりとしたままで目を覚ます様子もない。

「あーあ。鈴仙、こりやーやつちやつたかなあ？　いつかやると思ってたけど」

「や、やってないわよ!?　ちゃんと加減したもん!!　その……多分っ」

「意地張らずに素直に白状するウサ。情状酌量の余地はまだあるよ？　これ以上新キアラが出てくると、ますます存在感危うくなるだけもんね」

「なんの話よっ!？」

と、二人が馬鹿なやり取りをしている間に、少女がわずかに身じろぎをする。どうやらまだ息はありそうなのとに、鈴仙は静かに安堵し――

「……ふーむ」

目を回している少女の姿を一瞥し、てゐは面倒そうに眉をひそめる。

「どうする？　埋めちゃう？　鈴仙が」

「なんで私なのよ!?　対応おかしいでしょ!？」

「……ねえ鈴仙？　綺麗事だけじゃ人気商売はやってけないんだよ？」

「さっきのアンタの本音なわけっ!？」

「う……」

「あ、起きた」

物騒なやり取りに刺激されたか、ようやくもぞもぞと少女が動き出す。

土に汚れた顔、したたかにぶつけたであろう鼻先は赤く擦り剥けていた。上半身をゆっくりと持ち上げて唇を開き――

「み……」

「み？」

聞き返した鈴仙の前。ぷるぷると、最後の力を振り絞って、

「水……」

ばかり。

既に丸三日、竹林で迷い続けていた姫海棠はたては、それだけ呻いて気を失った。

【2】

「はあー……」

寝台の上、鼻の上に大きな絆創膏も痛々しく、姫海棠はたては大麦と野菜のスープを啜りながら、ようやく血の気の巡りの戻ってきた顔で息を吐く。

その脇では看護帽を頭に載せた鈴仙が申し訳なげに肩を落としていた。

「ごめんなさい。その……ちよつと早とちりしちゃつて……」

「本当よー。いきなり撃つてくるとかどうなのかしらー」
「まーまー、落ち着くウサ。一発だけなら誤射かもしれないから」

「直撃してるんですけどー!?!」

鼻を示して毛布を叩き、ひとしきり抗議していたはたてだが、ふと急に表情を変え、不敵な笑みを覗かせた。

「でも、あの迷いの竹林にこの嚴重な警備、ますますもつて間違いないわね。もうこれぞ月の姫の隠れ家って感じじゃないっ♪」

「姫様？」

「そうそう。ここに千年も引き籠つてゐるって有名な、かの月のかぐや姫様が住んでるのはもう調査済みなんだからねー？ 私はその取材に来たつてわけよ」

まるつきり自分のことを棚に上げつつ、はたては残る野菜スープを具ごとかき込むようにして飲み干す。

「むぐ。文のやつにトラウマ植え付けたつて言う五つの宝物とか、難題つてやつとかについて色々聞きたいことがあるんですけどー？」

取材。難題。聞き覚えのある単語に、てみると鈴仙は貼り付けた笑顔の下で、さりげなく視線を交わす。

「つてことは、やつぱりあんたも天狗なんだ？」

「当たり前じゃない。えつと……」

はたてはいそいそと傍に置かれていた頭標（かしら）を被り、ポケットを探つて印刷したてのインクの香りの名刺を取り出して胸を張つてみせる。

「花果子念報の姫海棠はたてつて言いますけどー。責任者の人つてどちらですかー？」

「あー……」

「やつぱり……」

真新しい名刺を前に、鈴仙とてゐは微妙な表情。しかしはたてはそんな二人をよそに自信ありげ腕を組んで、「それにあなた達のこともちよつとは知ってるんだから

ねー。ふたりとも人間の里で薬売りしてるんでしょ？
八意印の置き薬つての」

「へえ。おシショの薬も有名になったもんねえ」

「そうそう。で、確かあなたが幸せ兎って評判なのよね。」

みつけると幸運が訪れるとかー」

「クローバー四十枚分くらいはね」

たとえ相手が天狗でも、褒められて悪い気はしないのか、てゐは得意そうに胸を張ってみせた。

さらにはたては鈴仙のほうに視線を向け、

「で、こつちの兎さんがエロ担当のほう」

「こらあ!？」

「おー。良くわかつてるねえ。新参ホイホイなんて言われたのも過去のこと、いまじゃすっかり没個性の有象無象に埋もれて、格闘戦の性能の悪さとか、座薬ネタの他にはもう十八禁要員の穴埋めくらいにしかお声のかからない哀れな月兎だよ」

「待てー！ゐッ!？」

鈴仙が声を張り上げるが、てゐははたての傍に近づいて、わざわざ聞こえるように耳打ちを始める。

「気をつけた方がいいよー？ こんな可愛い顔しといて、これ以上人気無くないように、新キャラと見れば実力行使もためらわないよーな武闘派だから」

「ま、マジでー!？」

「またアンタは息するみたいに嘘をーっ!!」

ばんっ、と激しくテーブルを叩いて抗議の声を上げる鈴仙だが、急に何かに気づいたようにぱっとベッドの傍を離れて距離をとる。

不審な顔を見せるはたての前で、ずりずりと後ずさりしながら、しきりにスカート裾を押さえこんで、

「じゃ、じゃあ、……その、やつぱりあなたも撮るの?」

「なにを?」

「ば……ばんっ、とか」

「撮らないわよー!？」

顔を赤らめ告白みたいに言ってきた月のウサギに、はたては悲鳴を上げていた。しかし鈴仙は目に涙をためながら、ふるふると首を振るばかり。

「で、でも、前のときはさんざんっ……嫌だつて言ったのに、無理矢理……っ」

「鈴仙、忘れるウサ。犬にでも噛まれたと思って」

「あーもー、文のやつ!? どんだけ天狗を貶めてるんだーっ!!」

毛布の上に突っ伏してうなだれるはたて。

「うー。……そりゃね、天狗の新聞で派手さとか醜聞を好まれるのはそのとおりだけどさー。程度ってモノがあ

るじゃない？ 見出しとインパクトだけの写真で売ろう
って魂胆とか、私は好きじゃないんだけどー」

ちなみに、はたてが念写能力で山の外の写真を撮ろう
としたところ、その八割が桃色淫乱なものを想像させる
ものであったりして、激しく脱力する羽目になった。

「だから、天狗の新聞がいかがわしいものだなんて思わ
れるのは我慢ならないのよねー」

「ふーん。天狗にしちや殊勝な心がけだねえ」

「あいつとおんなじやり方で勝てるとも思えな……ごほ
ん。あ、あいつの真似なんかして勝っても当然ていうか、
つまらないしー？」

はみ出した本音はしまい直して、はたては握り拳も力
強く兎達に訴える。

「だからこそ、誰も注目してないようなところの記事を
書いて、そこに新しくファン層を開拓すればー、文の新
聞だって簡単に追い抜けるって感じじゃないー？」

「あー、それでわざわざ、公式にも稀有な美少女設定も
どこへやら、自宅警備どころか盆栽の手入れすらも仕事
と言ひ張る人気絶不調な竹藪のニート姫の取材に來たわ
けねー」

「てゐ！ またあんたはそんな悪口言って……」

「事実ですが何か？」

真顔で言われ、鈴仙も思わず返答に詰まる。

「う。……えつと、その、確かにそうかもしれないけど、
そこはその、色々よね？ 大人の事情が……」

「にしても間抜けな話だねえ。天狗が迷って干からびて
るだなんて。取材にきといて患者になるなんて、自分で
三面記事にでもなるつもり？」

「あー、酷いなその言い方ー。そりやさ、ちよつと迷つ
たけどー？ あの竹林、毘とかもたくさんあったしー、
あれちよつと普通じゃないって言うかー？ でもでも、
あれくらい私が本気出せば簡単になんとかになったと思
うけどねー？」

「そう？ 前に來た天狗なんか迷いもせずに邸まで一直
線だったけどね？」

「そそそそそんなの、当然じゃないー。っていうか私も
同じことくらいフツーにできるんですけどー？」

正確には真似のできそうな知り合いが文くらいしかい
ないということなのだが、無論そんなこと口が裂けても
言えるわけがない。

「とにかく！ こんな所で病人やつてる場合じゃないの
よねー。早くそのお姫様に独占インタビューを……」

カメラを取り出そうとしてスカートのポケットを探り、
はたてはびたりと動きを止めた。

「……………」

「ごそごそと服の中を探る手のひらが強張り、少女の顔からさあーっと血の気が引いてゆく。

「……？」

「か」

「か？」

（かかかかかかかかカメラなくしたーっ!?）

すかさずポケットの中で空を掻く指先に、少女天狗の背中からどっと汗が吹き出す。

毛布の下で何度改めても、どこにも慣れ親しんだカメラの感触が見当たらない。

（ええええーっ!? 何これえーなにこれー!? こ、ここにしまつてたはず……よねー? ……ちよ、ちよい待ち

落ち着け、落ち着けわたしー、落ち着けー!）

しかし、いくら落ち着いて服の下をまさぐっても、なくなつたカメラが出現する気配はない。

「さんねん! わたしの しゅざいは

ここで おわつてしまった!

（じやなくてー!?!）

脳裏をよぎる不吉な文字列に首を振り、花果子念報の

記者は、だらだらと汗を流しながら顔を上げ、実に卑屈な表情で鈴仙達を呼ぶ。

「……ね、ねえ、そこな兎さん達ー」

「なにか？」

「あの、えーと、大したことじゃないんだけどね? うん、全然大したことじゃないんだけどー、ちよつとだけ気になることがあつてねー? あの、私、どこかに何か落としてたりしなかったかなーつて……」

「落し物? てゐ、どう？」

「……あつたら気付いてると思うけどねえ」

「マジでー? ……嘘ー…ないわー、ありえないつてー…」
顔を見合わせて答えるふたりに、はたてはがつくりと肩を落とした。

（あー、やつぱ迷つてる時とかに落したりしてたのかなー……あー。あー。……どうしよー、どーするのよー。

マジでー。どつかで拾われてたりー? ……でもあんなところ誰も来ないわよねー。一応は河童特注の防水加工だからちよつとやそつとじゃ壊れたりしないだろーけど、だからつて安心してわけじやなくてー、いまここに持つてないのが問題なわけでー……うあー……）

毛布を被つてぶつぶつと呟きはじめる彼女の様子に、鈴仙が心配そうに訊ねる。

「なにか、大事なもののなの？」

「えっと……そのね」

答えるべきかどうか迷い、けれど黙っていても伝わるわけもないと気付いたはたては、上目遣いに毛布の下から顔を覗かせ、ぎこちなく微笑んで告白する。

「……か、カメラ……」

「……」

「……………そっか……」

返って来たのは、嘲笑よりも辛い沈黙だった。

（ヴぁー!? 言うんじゃないかってー!?）

後悔するがもう遅い。両手を振って否定を始めるはたてに、ますます憐みをこめた視線が集まる。

「ち、違ふのよー? その、今日はべつにちよつと様子見つてくらいで、本格的な取材はまた今度にとか、そういう感じでねー? そ、それに別に、写真なら後から念写し直してもいいんだしー」

「念写?」

目をぐるぐるとさせながら、はたては食い付きのあつた話題へ逃げようとする。

「そ、そうそう! それくらい、カメラさえあれば私にかかればあとでちよつと調べて簡単に——」

「ええと、じゃあ……なおさら早くカメラ、見つけない

といけないんじゃない?」

「……………」

「……………」

「ううううう……」

「あああ!? な、泣かないでー!?」

「鈴仙エ……」

崩れ落ちるはたてに駆け寄る鈴仙。

文とは異なり、はたての念写能力はカメラとセットで効果を發揮するものだ。

それを抜きにすればはたての立場はあくまで記者であつて、風を操り最速を誇る素早さも、千里先を見通す哨戒に長けた偵察能力も持ち合わせていないわけで。

つまりその愛機を失った今、姫街道はたては——

「た、ただのツインテール美少女天狗じゃないのー!?」

「……そこで伸びた鼻が折れないあたりは立派に天狗なんだね」

「あからさまな同情とかいらからー!?」

ぽんぽんと肩と叩いてくるてゐに、はたての涙ながらの叫びが響き渡った。

【3】

「はい、口開けてー」

「うえー……」

診察室の椅子の上、えー、と舌を出すはたての喉を診ながら、白衣姿の永琳が手元のカルテにあれこれと書き込んでゆく。

「あーあ。カメラ失くした間抜けな天狗が見れるって言うから急いできたのに、期待外れね」

「知らないわよー」

てゐの報告を聞き付けて、診察室にやってきてた輝夜が、つまらなそうに口を尖らせる。

「またぞろ盗撮にでも来たんだろうと思っただけど天狗って一匹じやなかったのね。やつぱりアレ？ 芥虫みたいなもの？」

「油虫てんぷりなんかと一緒にしないでくれるー？ 私はねー、もつと高尚な新聞を心がけてるのー!!」

「あらあら。……高尚ねえ。いとわろす」

永琳の診察を受けるはたてを眺めながら、袖で口元を隠して微笑むその様子は、まあ確かにお姫様らしいと言

えばらしいのだが、

「なんか想像と違うなあー。本当にかぐや姫なの？ 全然なよ竹つぽくないわよこのひとー。せいぜい竹藪レベルじゃないー？」

「本人捕まえてよくまあ言えるわね」

話通りであるならば、彼女こそ都の貴公子達の心を独り占めにし、さらには時の帝すら虜にしたという、絶世の美貌と触れ得ぬ高貴さを備えた月人、かぐや姫であるはずだった。

「むー……」

なのだが——当の本人がそうだと認めても、はたてにはいまいち納得がいかない。

しかし、輝夜はそんなはたての様子に気分を害した様子もなくころころと笑い、

「でも、あの天狗がトラウマだなんてちよつと面白い話も聞けたから、無礼については咎めないでおいてあげるわ。探し物は兎達にさせておくから。ねえ永琳？」

「それはいいけど」

聴診器を脇に置き、永琳ははたてに向き直る。

「貴女、最近睡眠足りてないでしょう。それに食事も。だいぶ栄養偏ってるわね」

「そ、そーかなー。……そーいえばすこし鼻風邪気味か

もー」

実は、はたては新装する紙面の構成を考え続けて数日徹夜しており、さらに言えばその時の寝不足の頭でこの永遠亭訪問を思い付き、そのまま突発的に突撃取材を思い立ったわけなのだが——そんな事は口にしない。

曖昧に笑いつつすん、と鼻を擦るはたてに、永琳はさらにいくつか、カルテに追記をして席を立つ。

「そんな体調で3日も迷えば身体壊すのも仕方ないわよね。いま処方するから待ってなさい。……てゐ、手伝ってくれる？」

「了解ウサ」

てゐを伴つて奥へと入つてゆく永琳に、はたては口を開けて感服する。

「大したもんねー。見ただけでわかつちやうの？」

「もちろんですよ。師匠の腕は折り紙つきです。その人の体調や状態にあわせて、万全の処方をしてくれるんですよ」

「永琳は天才だもの。……そうだ永琳、アレ見せてあげれば？ こないだ作つてた、間違えて珈琲に入れた時だけ甘くなる塩とかあつたでしょ」

「駄目よ、あれ食用に適さないんだから」

「適そうよそこはー!? 調味料でしょー!?」

凄そうな全然凄くないような話にはたてが律儀に突っ込んでみると、永琳はてゐを伴つて戻ってきた。はたてに三つばかり白い薬包を手渡して、

「はい、これ」

「もう出来たの？ 早いなー……」

「ええ、食間だから先に一包は飲んでおくといいわ、ウドンゲ、お水持つてきて頂戴な」

「う、これって苦かったり？」

ひと包をつまみ上げ、照明に透かしてためつすがめつするはたてに、永琳はどこか意地の悪い笑顔。

「うふふ。ウチの薬は普通のものよりも苦いわよ」

「うええー……」

「しょうがありませんよ、良薬は口に苦しつて言うじやないですか。その分効き目はとびきりですから」

顔をしかめるはたてに、はい、と水を渡す鈴仙。はたても頷いて渋々薬を口に含む。

「それでもないわよ？ てきとうにその辺の苦い成分足しただけだから」

「むしろ里で売ってるやつの方が効くよね」

「ぶーっツ!?」

見事なタイミングでぶふおっと口の中身を吹き出したはたての真正面で、鈴仙は見事に薬と水を顔面で受け止

めていた。

「……………」

「フオローしたのに大損ですな私」

「うつわ鈴仙眼え怖ッ!!」

びしょ濡れ薬塗れで赤眼の邪視丸出しにして凶悪に睨む鈴仙を、しかし永琳とてゐはさりと無視して、

「はい、というわけでこつちが本物よ。食後に2錠、忘れずにね」

「……………」

ますます視線を陰しくする鈴仙に、なんとなくこのノリが分かってきたような気がしつつ、はたてはそっと涙を拭う。

(苦労してんのねー)

永遠亭内の力関係をおおむね把握し、一人納得していたはたてをよそに、鈴仙が顔をぬぐおうと席を立ち、ふらふらと棚の方へと歩み寄る。

「……あ、鈴仙っ」

「え？」

てゐの警告は一瞬遅かった。タオルを求めて伸ばした鈴仙の指が、こつんと棚にあった瓶を倒していた。

「へ？」

その真下には、丁度いい具合に錠剤を受け取っていた

はたてがおり、ばしゃん、と溢れた薬瓶の中身は、ものの見事にはたての身体に降り注ぐ。

「うあー……いったーい……あーもう、なにこれ……」

……？ マジで今日は厄日かも……」

「ご、ごめんなさいっ!!」

バランスを崩し、おまけに椅子からもずり落ちて、床の上の水たまりの上、濡れ鼠になったはたては悲鳴を上げる。何か揮発性の成分が含まれているらしく、すう、と肌が冷え、強いにおいが鼻をついた。

「うぷっ……」

慌てて顔をぬぐうが、かえって肌を感じる刺激は強くなつてゆく。痛み始めた目を擦り、はたては不快感に顔を振った。耳や髪の毛の先からぽたぽたと足元に落ちる水滴が、じよじよに服の下にまで染み込んでくる。

「うあー……ちよっと、なんかあちこちひりひりするんですけどー!!」

「大丈夫よ、これくらいならすぐに中和して……」

言いかけた永琳は手元の瓶に貼られたラベルを見て、言葉を止め、

「……あつ」

「ちよっと!! それマジで怖いんですけどー!!」 冗談でもやめてくださいねー!! おい目え反らすなー!!」

「……そんな訳ないわ。冗談なんて、まさかそんな」
「ちよつとおー！？」

「それよりも早く服、脱ぎなさい」

「きやああああああー！？」

いきなり真顔ではたての胸元をはだけせにかかる永琳に、はたては悲鳴を上げて抵抗した。

「ちよ、ま、なに、なにー！？」

「いえ、貴女の発育具合にも勿論興味はあるんだけど」

「変態だー！？」

「あらあら、わるすわるす」

次は何が始まるのかと、まるきり他人事でわくわくした視線を向けている月の姫がやたらと腹立たしいが、はたてはそれどころではない。

それなりに長く生きてはいるはたてだが、それでも乙女の心を失っているわけではない。スカートを押さえ必死抵抗を試みるが、永琳はまったく苦にもせず、見事な手際ではたての衣服をはぎ取ってゆく。

「ぎやああー！？」

ついにあつさり下着だけにされ、まるつきり色気の無い悲鳴を上げるはたて。

「ウドンゲ、お風呂まで案内してあげて。できるだけ早くね」

「し、師匠！？」

「あなたも落ちついて聞いてちょうだい。悪い知らせと、もつと悪い知らせがあるんだけど」

「どっちも聞きたくないんですけどー！？」

「じゃあ悪い知らせと、それを誤魔化す嘘があるんだけど、どっちから聞きたい？」

「うわあメンタルに厳しい診療ー！？ 選択の余地なし

！？ あ、でもなんか段々医者コントみたいになってきたけどこれはこれでー！？ あ、これが本誌記者を襲う生命の危機！？ ってやつなのかなー！？」

「……結構余裕あるのねえ」

浴場へと運ばれてゆくはたてを見送りながら、輝夜は感慨深げにつぶやいた。

【4】

広々とした湯船にぼたりと雫が落ちる。

なみなみと注がれる、わずかに白く濁った湯の中に手足を伸ばし、桧の浴槽の縁に顎を乗せ、はたてはゆっくりと吐息をひとつ。

「ふいー……。こんな所で温泉入れるなんてねー」

極楽極楽、と頭の上に乗せた手拭いで額の汗をぬぐう。薬品を洗い落とすために案内されたのは邸内の湯殿だった。普段は小間使いの兎達も使っているらしい大浴場は、しかし今は誰もおらず、はたて一人の占有状態。

天狗の管轄である妖怪の山にも河童たちが作った共同浴場があるが、ここまで広々としたスペースを自由に出来るようにはできていない。独り占めするには大天狗並みの権力が必要だろう。

「もー、酷い話よね。取材拒否に強硬手段とかあるって聞いてたけどさー。でも、報道の自由はこんなことで挫けてちゃダメよね！」

数度お湯をかぶっていると、肌や目に感じていた痛み痒みはすぐにおさまっていた。対処の早さは確かなもの

で、大事には至らなかったことは僥倖だったのだろう。もちろんまだ多少の憤りも残ってはいたが、お湯の心地よさに強張った心もほぐされてゆく。

「山の外なんて何があるか知れたもんじやないと思つてたけどー、やつてみると案外楽しいもんねー。突撃取材つてのもの」

ひよつとしたらこれも月の都の風流なのだろうか、湯殿に面した内庭の外には白砂が敷かれ、竹と笹で組まれた飾り樋の上をさらさらと水が流れている。

ほんのりと硫黄の匂いを含ませる湯の中に脚を持ち上げて爪先を広げ、こうなったらもう気持ちいいからいつそ羽根まで洗っておこうか、と考えていたその時。

「ちょ、ちよつと待って、てゐ、なにしてんの!？」

「いいからいいから。早く脱いだ脱いだっ」

脱衣所の方がにわかに騒がしくなる。

はたてが顔を上げると、湯気で曇ったガラス戸の向こう、ごちゃごちゃと絡まり合う人影が二つ。

「待ちなさいってのにっ、私は単に着替えを用意しに来ただけで——」

「なに言ってるの鈴仙。そんなんじゃ機嫌直してもらおうなんて甘い甘い。自分のミスはちゃんと身体張って取り戻さないとダメよ?」

「ひあああ!? ど、どこ触ってるのっ!」

「これからお触りされまくるんだからどーでもいいでしよ。ほら、はやくサービスしてこーい!!」

「やめなさいーっ!? もうくだらないことで邪魔ばっか……ひやうっ!?……こ、こらあ!! てあっ!?」

「……そうねえ、一理あるわね」

「ひ、姫様までー!?」

ガラス戸を挟んで聞こえてくる姦しい騒ぎは、やがて一方にもう一方がふたりがかりで襲いかかり、片っ端から服を剥き始める展開となった。

ブレザー、スカート、ネクタイ、ブラウス、そして靴下と、なにやらこだわりのありそうな順序で衣装が宙を舞い、さらに間をおかず下着まで景気良くぽいぽいと引き剥がされてゆく。

縞模様の最後の一枚をめぐる激しい攻防が繰り広げられる中、

「ちよっと、やめてよ!! ひとを思いっきりヨゴレ役みたいに!? 黙って聞いてればどうい言う草よっ!? てゐ、だいたいあんたいつたい、私のことなんだと思ってるわけ!」

「何って……」

んー、とてゐは首を捻り、

「夜のウサギ?」

「夜の座薬売り?」

「夜の優曇華院?」

「ちよっと待て特に最後のっ!! ってか師匠、見てるんなら助けてくださいよお!!」

しかし彼女の叫びもむなしく、さらに相手が増えて三対一となり、玉兎はあつという間に丸裸。

「さあ、行つてきなさいなレイセイナバ」

「きやああああ!! ひ、姫様押さないで!!」

「お背中流しまーすっ。れーせんちゃんがー!!」

がらららと勢い良く開いた湯殿のガラス戸から、丸裸の鈴仙が洗い場に放り出される。

「ふぎゅっ……」

床の上につんのめり、べしやんと転んだ鈴仙は薄い水しぶきを跳ねさせた。

濡れた洗い場の上、可愛い尻尾を見せながらスライディングした彼女の頭が洗い桶にぶつかつてすこおんと良く響くいい音を立てる。

「よーし、どんどん行くよー」

さらにその後ろから次々と放りこまれるいかがわしい品物の数々。とりりとした液体の詰まった瓶、ぴかぴか銀色のエアーマットに、U字型をしたやたら不自然な格

好の洗い椅子。

急展開に付いていけず、はたてが目を丸くしていると、脱衣所の入り口にはいつの間にか大勢の兎達が詰めかけていた。何を期待しているのか、彼女達の顔は赤く、息を飲みながら展開を見守っている。

「ご休憩入りまーす!!」

『はいりまーす!!』

「一名様ごあんなーい!!」

『ごあんなーい!!』

「違ああああう!」

並んだウサギ達が唱和する中、鈴仙は叫ぶがてゐは聞く耳持たず、満面の笑顔。

「じゃあお客さん、入浴料もサービス料も出血大サービスにしとくウサ!! たっぷり楽しんでいってねー!!」

「だ・れ・がっ……」

がばと身を起こした鈴仙は、足元に転がっていたいかがわしげな品々をひとまとめにして抱えあげると、脱衣所に向けて放り投げた。

「そんなことするかーっ!!」

どがらがしやんと騒々しい音を響かせる中、兎達が蜘蛛の子を散らすように逃げてゆく。

鈴仙はぜいぜいと息を荒げながら、ずかずかと大股で

脱衣所の入り口に歩み寄り、力いっぱい叩き付けるようにガラス戸を開める。

「あーもうっ、本っ当に余計なことばかりするんだからっ!!」

肩をいからせながら振り向いて——そこようやく鈴仙は、湯船で一部始終を見ていたはたてに気付く。

「あ」

「……………」

ぼたーん、と湯船を天井からの湯気の雫がたたく。

鈴仙はぎぎぎ、と油の切れたブリキ人形みたいな動作で、ペしやんと尻もちを付くと、足元に落っこちていた濡れタオルを引つ張り上げて前を隠す。

「え、あ、そのっ…………えー、…………あはは…………」

ぎこちない笑顔を、赤く染めながら、ちらりとはたてを見上げて耳を擦る。

「ご、ご迷惑をおかけしました…………」

「……………わ……………」

タオルから白い肌を透けさせる月兎に、思わず息を飲んでしまうはたて。

「あ、あの?」

「うっわー、えろーい…………」

「な、なに見てるんですかーっ!?」

しみじみこぼれた新聞記者としての正当な感想に、弾かれたように鈴仙が背中を向ける。しかし今度は肩甲骨から腰へのラインや、やや大きめのおしり、そしてその上に生えたふわふわのしっぽが丸見えになり、ますます逆効果だった。

(……うわー。うっわー……なにあれ。えろーいつ!? わー。うわー。あの丸いしっぽってどーなってるのかなー……あーもうっ、なんでカメラ持ってないのわたしってばー!!)

「あ、あのっ……」

「あ」

そこでようやく、泣きそうになっている鈴仙の様子に気付き、はたては我に返る。

気まずい気分のまま、はたては視線を反らし、ちよいちよい、と湯船のへりを指差した。

「えっと……その、入る？」

「……えっ」

「ああいやその、ヘンな意味じゃなくて!! ほら、風邪ひいちゃうかなーって。ねー？」

「ううう……」

気を使われているのが分かったのだろう。鈴仙はさめざめと泣きながら、小さくこくと首を縦に動かした。

その様子は、やはりいつも彼女があんな風にいじられて
いる苦勞を偲ばせるものであった。

「苦勞してるのねー」

「……ううう……」

お邪魔します、と湯船の隣に並び、ちやぷ、と湯船を
溢れさせんばかりの勢いで涙を流す鈴仙に、はたてはち
よつとばかり同情を禁じ得なかった。

【5】

「ではっ♪」

「ドキドキ♪」

「千歳飴ゲームっ!!」

「いえっっ!!」

ぱん、と手を合わせる輝夜とてゐに合わせ、うさぎ達がどんどんぱふふと囃子を打ち鳴らした。

座敷中央に設えられた席に座らされたまま、置いてきぼりのはたての周りを、てゐはびよんぴよんと飛び跳ねながら、どこから持ってきたらしいプラカードを高々と掲げる。それに合わせて、兎達から黄色い声の大歓声が巻き起こる。

(え、何この……なに?)

あまりの展開の速さについていけず、はたては周りを見回す。ついさっきまで、風呂上りの浴衣に着替えて縁側で熱燗を一杯と洒落こんでいたはずなのだが。

気付けば贅沢な酒宴の膳を整えられた大広間の真ん中に、鈴仙と向かい合わせに座らせられて、兎達の大観衆に取り囲まれている。

縦るように隣をみれば、同じように座らされた鈴仙も、あつけにとられるまま視線をさまよわせていた。困惑しているのが自分だけではないことに少し安堵を覚えるはたてだが、そうしている間にも輝夜とてゐによる仕切りは進んでゆく。

「まー、ぶっちゃけお風呂イベントで十分親交を深めてもらって、フラグとCG回収も完了したところで、二人にはもっと仲良くなってもらおうって趣向ウサ!!」

輝夜はテーブルの上にあった細長い包みを開け、そこから桃色の細長い棒を取り出した。

「ルールは簡単よ。この永琳特製の千歳飴をそれぞれの端っこからくわえて食べていって、先に口を離しちゃった方の負けー!」

「憧れのあの子と急接近!? 思わぬハプニング目白押しウサ!! 挑戦するのはご存知、はたてちゃんといえんちゃんのお二人さんだー!!」

まるで姉妹のように息もぴったりと、ポーズまで決める二人。いつの間にか出来上がった観客席から、テンション高く兎達の歓声が響く。その最前列では永琳が外人4コマよろしくガッツポーズを決めていた。

「ではれーせんちゃん、はたてちゃん、どうぞー!!」
「むぐっ!!」

何か言う暇すら与えられないうちに、はたての口に千歳飴の端っこが押し込まれた。

「ちょ、ちよっと、てゐ!」

「ほらほら、お客さん待たせちゃいけないってば」

抗弁の声を上げようとした鈴仙も、背中からてゐに頬を押さえられ、はたての反対側の飴を口に含ませられる。

ちようど、膝と膝を交互に交わらせるほどに近くまで、飴を啜って向かい合っている格好になる。

「んう……ッ」

太い飴を無理矢理口に含まされ、眼前で苦しげに眉をよじる兎の表情は、同性でも思わずどきりとするほど色っぽかった。無意識のうちにカメラを探るが、はたての浴衣の中に手に馴染む愛器の感触はない。

「準備完了っ!! ではっ、姫様お願いしますっ」

「ええ。……スタァーッ!!」

輝夜のコールにしたがってウサギ達がそれそれと掛け声を上げながら、手拍子足拍子で曲を奏で始める。

(ちょ……ちよっとお……ッ)

焦りながら身体をよじるはたてだが、異様な雰囲気になされて立ち上がることはできなかった。

向かい合う先で、鈴仙は困った様に、上目遣いではたてを見上げ、ゆつくりと口を動かし始めた。

(うわあ……!?)

くち、くち、と小さな唇に差し込まれた飴を舐り、薄い桜色の下が時折、ちろりと先端を覗かせる。長い耳はくterりと力を失って垂れ、羞恥を示すようにほんのりとした色づいている。

舐め溶けた飴をこぼさぬよう、頬にかかる髪をかきあげ、はしたない音を立てて唾液をすする仕草は同性ですら直視を躊躇うほど。

「おおっ、さすがれーせんちゃん。ノリノリだー!!」

「うーん。エロいわね無駄に」

「そうなのよ。無駄にエロいの。……だから困るのよねウドンゲは。色々。うふふ」

「んんんーっ!」

冷静に解説され、叫ぶ鈴仙だが、口の中に飴を突っ込まれたままではそうもいかない。もごもごと動かされた飴を伝って、はたての口内に鈴仙の舌の動きが響き伝わってくる。

(うう……ッ)

頬を赤くする鈴仙の舌使いを感じ取ってしまい、はたてもかあと頬が熱くなつてゆく。

煽るように兎達の囁し立てる声が高まり、急かされるように、はたても口の中の千歳飴を舐め始めた。

「んう……っ」

「おー、こつちもいいいいいよー。ちよつと目線お願いしまーす」

指二本分はありそうな硬く太い飴に舌を絡め、唇をすぼめると、甘ったるい味が口じゅうに広がり、飲み込んだ喉にも絡みついてゆく。

「ひゅーひゅー!! そーれ、そーれっ」

周囲から立て続けに白い閃光が焚かれる中、てゐの音頭とともに、いよいよゲームは本格化し――

も(こ)も(こ)。

も(こ)も(こ)。

も(こ)も(こ)も(こ)。

……も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)も(こ)。

「つて長いよー!!」

ようやくツツコミのタイミングを見出して、はたては鈴仙と自分の口からひっこ抜いた千歳飴を床に叩き付けていた。

ばんばん、と踏みつぶすように脚を踏みならし、両手を広げて力説する。

「もつと食べやすいものでやるトコでしょーこういうの!?! よりによつて飴とか!?! 全部食べきるのにどんだけかかると思つてんのー!?!」

「「ええー……」」

「ちよ、なにそれー? 全員揃つて心外みたいな顔されてもー!?! わたしだけ空気読めないみたいな扱いー!?!」

扱いではなくそうだと言いたげな表情で、てゐは腕組みをしている輝夜を見上げ、

「むー。じゃあ姫様、次いこ、次っ」

「そうね、じゃあ永遠亭名物、姫様ゲーム!!」

「いえーっ!!」

わあ、とまたもはたてを置いてきぼりにして盛り上がる一同に、しかしはたてはいはいつと力強く手を挙げて割り込む。

「……ちよつと待つて!! な、なんかそれ聞いたことないようなあるようなんだけど、どーいうやつー?」

「何つて、王様ゲームみたいなものよ。ずっと私が王様だけど。あ、レイセンイナバはパン買つてきて。3分以内ね」

「王権神授説ー!?! あゝ、それどう考えても全然楽しくないんですけどー!?!」

「ひれ伏しなさい愚民どもゲームつて言つてもいいわね。」

じゃああなたはジュース買ってきて。5分でいいから」
「ぜんぜん良くないー!? ていうかそれただのパシリ
でしよーっ!?」

握りこぶし作って精一杯異論を差し挟むはたて。

「ちなみに王様ゲームの原型となった遊びの歴史は存外
に古くて、19世半ばのイヴァン・セルゲーエヴィチ・
トゥルゲーネフの著作の『初恋』には既に類似のゲーム
が登場しているわ。さらに遡って中世の欧州の社交界で
も似たような遊びが行われていたという記録もあるくら
い、由緒正しい合コンゲームなのよ」

「そこも丸映しの解説してないでーっ!!」

「それはそれとしてウドンゲ、ちょっと試したい新葉が
あるんだけど」

「むぐーっ!」

「もはや王様すら関係ないーっ!? てかお願いもうや
めてあげてー!」

「うふふ。大丈夫よ、さっきの五割増しでいやらしくな
るだけだから。ねえウドンゲ?」

「なにがー!」

叫び続けで喉が枯れ、はたては咳き込みながら手近な
グラスを呷る。

(もうツツコミ疲れたあー……ここ素でボケなんだかな

んだかわかんない人ばっかでやりづらいよお……やつぱ
取材とかやるんじゃないかなかったかも……)

思わず目元が熱くなり、ぐるぐると世界が回り始める。

メリーゴーランドのように転じ巡る視界の中、はたて
はおもむろに浴衣を着崩し、ばさあつと背中黒羽根を
広げた。

「暑いから脱ぐー!!」

唐突の宣言にも、もはや誰も止める者はいない。わあ
あと上がる歓声の中、空になったグラスがテーブルの上
を転がっていった。

【6】

「ん……」

耳の奥に残る宴会の騒々しさに顔をしかめ、はたては温まった布団の上にもぞもぞと身体を起こす。

なぜか寝具の枕元に用意されていたティッシュで鼻をかみ、ぶると背中を震わせる。

「お手洗い……」

隣で布団にくるまって寝がえりを打つ鈴仙を起こさぬよう、手探りで伸ばした障子を押しあげると、ひやりとした夜気が頬を撫でる。

「ん、起きたの？」

「あれ……？」

寝惚け眼を擦ってみれば、縁側ではてゐが首タオルにドロワーズ一枚の格好で、ほこほこと風呂上がり湯気を立てながら、フルーツ牛乳を一気飲みしていた。

「んっ……ふあっ。ふー。生き返るねー」

口元にできた白い牛乳ひげを拭いて、てゐはにまりと笑顔。

「派手に酔ってたみたいだけど、平気？」

「あああ当たり前じゃない？ 私、これでも天狗なんだからねー、あれっぽっちで酔うわけじゃないじゃんー？」

「はいはい。そういうことにしといてあげる。で、れーせんちゃんの添い寝サービスはどーだったかな？」

「……寝てるわよー。大きいきで」

「はー。やれやれ。自覚の足りないエロ担当は困るねえ。いくらサービス満点でも寸止めばっかじゃ飽きられるってのに。自主規制もほどほどにしないと」

相変わらずの物言いに苦笑しつつ、はたては廊下へと出た。縁側の板は少し冷たく、胸元に寒さを感じて、はたては浴衣の前を直そうとする。

「あれ……よつと……」

「あーもー、見てらんないなあ」

びよいと椅子の上に飛びあがったてゐは、慣れた手つきではたての着付けを整える。

「みんないい歳してるんだから、もう少し手のかからないようになって欲しいもんね」

「……………う」

赤面するはたてに、呆れたように耳をぱたぱたと動かして、顔を仰いでみせるてゐ。そこには昼間のような子供っぽさは影を潜め、幼い外見に似合わない老成した気配があった。

「えつと……」

「ねえ、あんた。ぶつちやけ取材とか全然経験ないんでしょ」

「し、新人ちやうわー!? そそそそそ、そんなことないわよー!? 鳥天狗なのよー? も、もうベテランもベテラン、これ以上ないくらいにねー……!?!」

「嘘吐いたって分かるよ。ってか分かりやす過ぎ」

くすくすと、てゐは目を細め、

「ここに来る奴はみーんなね、嘘が下手なんだよ。誰も彼も人恋しくて寂しい癖にさ。強がってばっかで、馬鹿しいったらありやしない」

「ず、随分上から目線ねー?」

「当たり前よ。伊達に長生きしてないっての。そもそも私はこの兎のリーダーなんだから。元はこのお屋敷だって竹林だって、私達の持ち物よ? 姫様たちにはそれを貸してあげてるだけ」

牛乳瓶を傾け、またこくこくと喉を湿らせて。てゐは頭上を振り仰ぐ。

そこには、満天の星空と緩やかに美しい半円を描く月が上がっていた。半分だけの月には、餅を搗く兎の耳先だけが映っている。

「姫様はそうでもないけどねえ。お師匠も鈴仙も、あれ

これ口実にして誰も傍に近づけようとしなんだから。永遠の命も、逃亡の罪も、月の追手もなにもかも、もうぜーんぶ昔のことなのに」

彼女の口にした言葉には、はたてが求めていた、月の姫たちの秘密が含まれていた。

恐らくはまだ文も知らないような彼女達の秘密、遠い遠い月での昔話。

「え、えーつと、そこんこももう少し詳しくっ」

スクープの匂いを嗅ぎつけ食いついたはたてに、てゐはにへりと笑ってみせた。

「月見て泣いて目え赤くして。せっかく拾った自由なんだから、もつと大勢で騒いで気楽に生きてりゃいいのよ」

「自由?」

「そ。自由」

くいつ、と逆さまにしたフルーツ牛乳を最後の一滴まで飲みほして。てゐは空になった牛乳瓶を放り投げる。

狙い過たずガラスごみの中に飛び込んだ瓶を振り返りもせず、彼女は飛び降りた庭で肩をすくめてみせた。

「まったく、こちとら頑張って健康に気い使って生きて、月見て跳ねてきたのにさ、不幸な顔されてちゃたまんないよ。同じ跳ねるなら陽気でなきゃ。うじうじ悩んで、不健康ったらありやしない」

ぴょん、と月めがけて高く跳ねたてゐは、くると身を回し、向かいの屋根上へと腰掛ける。

「……だから、たまにはこーいうのも面白いかなって思うのよね。——伝統と実績の老舗旅館、永遠亭。名物は月見うどん。ご休憩五千円、ご宿泊一万円ぼつきり。よ夜は揃って大宴会。いまなら幸運のおまけつき」

くすくすと笑い、てゐはぴょんと屋根を飛び降りる。
「失せ物探しも効果アリ、ってね」

「わ……つとと」

彼女が身を捻りざまにひょいと放り投げたものを、はたては思わず顔の前で掴んでいた。

それは手の中に収まるほどの、軽くて薄い長方形。良く手に馴染む感触は、いつも手にしている——

「あーっ!？」

「ね? いいことあったでしょ?」

はたての携帯型カメラを放ったてゐは、にいつ、と。空に浮かぶ三日月のように、軽快に大きく歯を見せた。

「つて、ちよつとー!？」

「悪いけどE a s yモードの新人さんにや、まだ姫様達には会わせてあげられないの。2時間前に出直してきな、つてやつかな」

「な、なにそれー!？」

「またのご来訪お待ちしてるよ。んじゃ、おやすみー」
はたての伸ばした手からもすり抜けるように、悪戯うさぎは微笑んでぴょんと大きく飛び跳ねて、向かいの離れの奥へと逃げだしていった。

うーと【鳥兎】

《『金烏玉兎(きんうぎよくと)』の略。
太陽には鳥(からす)、月には兎(うさぎ)がいるという古代中国の伝説から》

1 太陽と月。日月(いつげつ)。
2 年月。歲月。「——匆々」

(了)

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『鳥^{からす}と兎^{うさぎ}が匆々^{あわただ}しく』はダブルスポイラー本編の後、脱ヒキコモリを掲げて取材に飛び出したはたてさんが永遠亭を訪れ、そこで取材とか他者との触れ合いについて考えてみたり、あまり考えなかったりする、当サークル11冊目のSS本となります。

気軽に読めるものと考えていろいろ頑張ってみましたが、結局いつものノリになってしまったような。時の動き出した永遠亭での鳥兎^{うとそうそう}匆々^{あわただ}の日々をお楽しみいただければと思います。

拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

—— それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

「鳥^{からす}と兎^{うさぎ}が匆々^{あわただ}しく」

—— 姫海棠はたての永遠亭探訪録——

発行 平成二十二年十月十一日 「東方紅楼夢6」

オルハザカサンバンチ

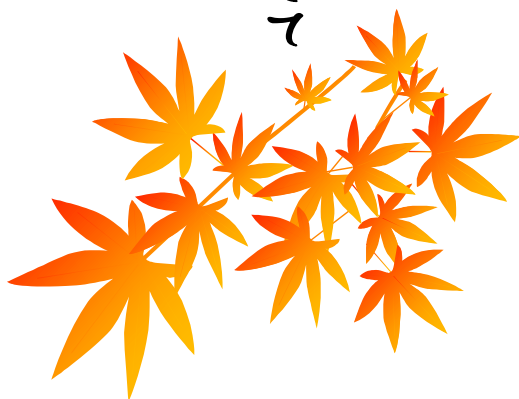
折葉坂三番地

銅^{あかがね}おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>

<http://members.jcom.home.ne.jp/oriha/index.htm>

月日は百代の過客にして
行かふ年も又旅人也。



東方project Fanbook
2010.10.11 発行
折葉坂三番地

